第一節　大いなる期待を双肩に

学長兼校長に伊藤一郎先生就任

創立者であり、短期大学学長兼小・中・高・栄養の校長であられた伊藤友作先生が、八十歳の高齢に達し、また創立二十周年記念の式典を終えたのを機として、退任され、昭和三十六年四月、副校長として多年父君友作先生を補佐してこられた伊藤一郎先生が、新学長兼校長に就任された。

中高ＰＴＡを奨学会と改める

昭和三十六年五月二十七日、講堂二階控室において行われた「中高ＰＴＡ理事会」は、従来のＰＴＡを奨学会と改称する旨の議が出され、承認された。

母姉会の発足

昭和四十年五月二十二日に、本学院の中学・高校の母姉会が発足した。

子どもを健全に成長させるためには、学校と家庭とがお互いに手を携えて進まなければならない。特に子

女の家庭教育においては、母親の占める役割は大きい。しかし、家庭婦人は毎日繁雑な家事に追われ、とかく余暇も少なく、自分の時間すらない有様である。これでは子どもの家庭教育は充分できず、子どもの話相手、相談相手にもなれない。こんな状態から、母姉が家庭教育の担い手としての資質を高め学校と更に協力し、健全な子女を育てるためにこの会が誕生した。母姉会は、現在奨学会の母姉部として、引続き活動している。

新築された中高本館

第二節　中高本館新築落成

本学院創立以来二十余年を経た老朽校舎に代わり、昭和三十八年四月に中高本館が落成した。

教室数二〇室、管理部門として、校長室、事務室、職員室、会議室、及び医務室があり、搭屋を含み延面積三、一一〇・一八平方メートルである。ここにはじめて四階建て鉄筋校舎が本校に完成し、次の第二期、第三期の校舎鉄筋化の嚆矢となった。これは、これまでの増改築とことなり、多大の経費を要するところから、学校債を募集し、経費の一部を父兄の協力にあおいだ。この学校債は、生徒一人につき、一口一、〇〇〇円で三口以上とし、償還は卒業期とい

うことであったが、父兄の積極的な参加を得、順調にその目的を達成することができた。

本館落成式は、本館の他に特別教育施設の整備をおえた秋十月二十五日に盛大に行われた。

第三節　学院長の欧米教育視察

海外教育視察のため、学院長伊藤一郎先生は昭和三十九年五月二十四日より六月十七日までの間、欧米各国を視察して帰られた。学院長は、この視察で得たものを逐次学院教育に生かされ、よりよい教育の充実発展を図られた。

欧米視察に出発される学院長

第四節　偉大なる業績を残して

一、創立者伊藤友作先生逝く

昭和三十九年十一月十九日午後三時、創立者であり理事長であった伊藤友作先生が、八十三歳で逝去された。病床に就かれたのは僅か数日間で、教職員の多くは先生の病床にあることさえも知らなかった。日頃壮健であられ、つい先ほどまで元気な御姿を学校で拝見していたことであるから、あまりに突然で信じられないほどであった。

御逝去の翌日、午後六時より通夜が行われ、学校構内の理事長宅の庭は、創設以来の卒業生、生徒の父兄、教育関係の方々をはじめ多くの人々の焼香引きも切らず、しめやかに行われた。

創立者伊藤友作先生葬儀

ついで告別式は、二十二日午後一時より、講堂において厳粛にとり行われた。千葉県知事友納武人、市川市長浮谷竹次郎、千葉県私立中学高等学校協会代表平田博、千葉県私立学校団体代表植草こう、友人代表臼井荘一、昭和学院教職員代表で葬儀委員代表福島耀三、昭和学院奨学会代表、同窓会代表、生徒代表等の弔辞が次々と捧げられたが、それは、創立者故理事長の偉大な功績と、超人的な日夜にわたる精進をたたえ、また生前の面影を敬慕する言葉に満ちていないものはなかった。

告別式後、校庭において生徒と最後の対面をされた。職員数名に

よって守られるが如くささえられた櫃が、校庭に居ならぶ生徒たちの前を、かなしくも厳かに奏される葬送行進曲の中を粛々と一周し、葬場に向かった。営々として築かれた校舎の姿ともこれを最後の別れとして。

二、故理事長夫人――学院長母堂――逝く

学院長伊藤一郎先生の母堂伊藤もと刀自は昭和四十二年十月二日午後七時二十分、心筋梗塞のため急逝された。享年七十四歳であられた。刀自は故理事長伊藤友作先生とともにいくたの困難をのりこえ本学院の創設、発展に内助の功をつくされた方であり、前理事長先生の御逝去のあと、本校の発展を見守って、まだまだ長命であっていただきたいと慕われていた方だけに、突然の御逝去は大きなものを失ってしまったという寂莫の感にたえぬものがある。

現在は創立記念館となったが、お住居が近かったので、いつもそのやさしいお姿が拝見された。ただでさえ困難な戦前戦後の世相の中を、しかも大きな学校の経営者の伴侶として力をつくされ耐えてこられたさまなどを、少しもおもてにあらわされず、いつも笑みをたたえていられたお姿、また、仕事で夜分にわたった職員などへの優しいお心づくしなど忘れることができない。

学院長御一家のお嘆きもさぞかしと察せられた。故理事長夫人は御主君の御逝去のあと、ずっとお一人で生活されていたが、御高齢でもあり、もしものことがあってはと、学院長御自宅の敷地内に別宅を建て、そこに住まれることとなり、前日移られたところであった。かえすがえすも残念なことであった。

三、創立者の遺志を受け継いで

創立者伊藤友作先生は、本校創立後、学院経営に日夜専心すべく、千葉市内にあったお宅を、昭和十八年この学校校地の一隅に移築された。それが現在の創立記念館である。この建物は亡き創立者御夫妻の面影のごとく慕わしく、かたみのごとく残された。

創立記念館

創立当時の学院の面影を残すものは、今はただこの邸宅のみとなった。その庭園に美しく配された樹石のたたずまい、建物の柱の一本一本にも創立者のいぶきの残っているこの建物は、創立以来この学びやに薫陶を受けた、いくたの卒業生や、また学院発展にあずかった職員その他多くの人々にとっても、忘れがたい心のふるさとでもあろう。よってここに、この建物を創立記念館と命名し、ながく保存されることとなった。

この邸宅は、一つの応接間の他はすべて和室であり、主として、クラブ活動及び課外活動の茶道、箏曲等の情操教育の面に毎日のように活用されている。

奨学金制度発足

伊藤奨学金制度は、故理事長先生の御遺志によるもので、昭和四十年度から実施された。この奨学資金制度は、当時の日本育英会の奨学資金制度と違って、優秀生徒に対して奨学の目的で支給するもので、返済の必要なしという特典をもつものであった。

四、伊藤一郎先生昭和学院理事長に就任

昭和三十六年三月、本学院創立者、学院長の伊藤友作先生は、昭和学院校長・学長を退任し、以来理事長に専任された。昭和三十九年十一月のご逝去に伴い、理事会は後任理事長として伊藤一郎先生を選任し、昭和四十年一月一日、学校法人昭和学院理事長に就任され、学長、校長に併せて、理事長を兼務することになった。

第五節　創立二十五周年記念式典及び記念事業

一、記念式典挙行

昭和四十年十月二十五日に、本学院創立二十五周年記念式典は講堂において盛大に行われた。この式典には二、〇〇〇人もの多数の来賓・父兄が臨席し、シンフォニッタ・サファイヤの荘厳な「君が代」演奏のもとに、式典の幕が開かれた。晴天に恵まれ、意義深い記念式典であった。

二、高く聳える中学館

創立25周年記念式典

創立二十五周年を真に意義深いものにするために、昭和四十年度には諸施設の改善整備が図られた。まず最初に、昭和三十九年九月に着工された中学校新館が、半年の工事の後、昭和四十年三月三十一日に竣工した。

校舎の総面積は四八九坪、建設にあたっては、御父兄から大きな協力を仰いだ。建物は、鉄筋四階建てで、高校本館についでの近代建築として完成し、中学校一同の喜びは大きかった。

校舎内部は、普通教室が九教室あり、一階に二教室、二階に一教室、三、四階にそれぞれ三教室あった。教室の他には、二階に職員室、応接室、放送室が設けられた。この中で放送室は、放送センターの完成により、これに吸収され、昭和四十六年度秋に、図書館分室に改造され、中学校の図書室として使用された。その他階下は、広い玄関ホールと下足室になっていた。

昭和四十年六月に発行された学校新聞によると、当時の生徒の感想では、「教室が新しくなったので、新たな気持ちで、落ち着いて学習し、行動できる」「木造建築と違って、教室内は暗くなく、また外部の騒音も聞こえず勉強にも身が入るようになった」「掃除をすればするほどきれいになるのでやりがいがある」とその喜びを述べている。

新築された中学館

昭和四十年四月二十三日、二十四日の両日、父兄を招いて校舎内の巡覧が行われた。ここに完成した中学校新館校舎は、木造校舎に比較すると、第一に明るくて広い、夏は風通しよく、冬でもすき間風が入らないのでそれほど寒く感じない、秋冬でも暖かい日ざしがいっぱい教室内にさし込む、このように、自然条件も鉄筋校舎には有利に働くようである。

中学校の学級数が、各学年共四クラスということから、建設当時はまだ三教室ほど不足しており、一年生の三クラスが木造校舎を使用していたが、昭和四十五年度に中・高の校舎が完成し、教室が充足された。新校舎は、中学館、それに接続して新設された高校校舎合わせて、長さ一〇五メートルの建造物であり、菅野の地にその雄姿を誇っていた。創立三十周年を記念して、この校舎の北面道路両側に染井吉野の桜を五〇～六〇本植えた。今では、それが生長して、幹は太くなり、枝葉は生い茂って、恰好の桜並木をつくっている。

三、緑陰をつくる大庭園

本学院では、校舎の建設と共に環境整備にも力を入れてきた。昭和四十年七月には、講堂脇に約一〇〇万円の費用をかけて洋式大庭園及び噴水を完成した。

この庭園を造成する動機となったのは、前年の昭和三十九年に学院長が欧米視察旅行をされた折、コペンハーゲンのチボリー公園の美しさに心ひかれ、学院内にも庭園を造り、環境美化に努めると共に、児童、生徒、学生の憩いの場所を備えることにあった。庭園には二重噴水が造られ、その周囲には、一面に芝生と樹木が植えられた。なお、この庭園造成にあたって、ここに故理事長先生の胸像を、従前の位置から移転した。

この年にはまた、視聴覚館脇から元の理事長先生胸像跡（第二社会科教室前）一帯が舗装され、雨の日でも安心して歩行できるようになった。

その他に、生徒が自然に親しみ、樹木愛護の精神を養うために、中学、高校の花壇が造られ、高校ではコース別に造られた。父兄の協力もあって、苗木や草花が寄贈され、生徒自身の手によって植えられた。夏休み中も交替で除草や注水が続けられ管理された。昭和四十年九月に、公徳心目標「樹木を愛護しましょう」が定められた。花壇愛護が一層盛んになった。十月には、植えられた菊が、赤、黄、白と咲き誇り、一段と華やかさを増していった。その後、園芸部員の手によって植えられた矢車草、千日紅、金盞花、マーガレット、紅サルビアなどの苗木が毎年美しい花を咲かせた。

四、語学力を伸ばすＬＬ施設

昭和四十年度は、数々の特別教室が設置された。中でも語学演習室は、当時千葉県下でも設置校は少なく、私立学校では、本学院が最初であったことから注目された。このＬＬ教室の完成には多額の経費を要した。学院長の現代教育に対する強い関心と、英語科職員の熱意によって、昭和四十年九月に完成した。場所は旧本館内の図書館二階に設置された。

この施設は、昭和四十一年十二月二十七日未明の火災で焼失したが、昭和四十二年にはＬＬ教室が再び設置され、更に充実した施設がつくられ、この設備を利用して、「話す」、「聞く」という最新の英語教育が行われていた。

第六節　美しい白樺林の中に――八ヶ岳山荘――

人間は誰しも自分の心の中に、美しい自然を求める。しかし、都会に住んでいる生徒の大半は、自然の風物に接する機会は比較的少なくなっている。このようなことから、少しでも自然に親しませ、また集団としての共同生活を身につけさせるという配慮から、山梨県の八ヶ岳山麓に広がる広大な土地、清里高原に、本学院の林間教育施設が昭和四十年六月二十五日に完成した。この施設は、創立二十五周年記念行事の一環と

して行われたもので、着工は三十九年十二月であった。

八ヶ岳山荘は、山林の施設であるために、湿気が多く、しかも、木造の建物であるので、その保存には十分に留意し、開校以来増築、改修を行ってきた。特に平成八年には、屋根、外壁の全面的な改修、塗り替えといった大工事を行うと共に、玄関その他内部の破損個所の改修がなされた。林間学校は多く夏休みに利用されることから、工事期はそれらにあわせて、春先から着工した。この改修により、建物も従前と見違えるようになって、小学校から短大まで、校外学習の利用者に大変喜ばれた。

建築中の八ヶ岳山荘

毎年各学校で利用されてきたが、老朽化したため、平成十六年に改築を検討し、実施設計まで行った。しかし時代の変化もあり、各学校から利用の希望が少なく、八ヶ岳山荘は平成十八年をもってその歴史をとじた。

第七節　校訓「明敏謙譲」を象徴して
――ブロンズ少女像成る――

昭和三十九年に、東京オリンピック大会が東洋で初めて開催された。この輝かしい東京オリンピック大会を記念して、本学院の校訓のシンボルとも言うべき少女像「明譲」が本学院短期大学教授、彫塑界の権威新井喜惣次先生の手によって制作され、昭和四十年三月に完成した。これは、新井

先生半年にわたる力作で、六尺余りのブロンズ像である。少女像のモデルは、昭和四十年の春、本学院を卒業した多賀谷靖子さんで、陸上競技で活躍した選手である。かも鹿のように足がすらっとした一人の少女が、両手を広げてゴールインした姿を像にした等身大のブロンズ像である。

「明譲」と命名したのは学院長で、校訓の「明敏謙譲」の「明」と「譲」をとった。本学院の校訓は、性格は明るく、素直で、健康であり、物事においては機敏である。すべての面において積極的な意欲をもち、相手を敬い自己をへりくだる。この精神は、スポーツ精神と軌を一にするものである。少女像の印象は、「少女」という言葉から受ける弱々しさは少しもなく、むしろ、筋骨隆々とした中に、躍動さえ感じられる。長距離を余裕たっぷりにゴールインした美しい姿である。少女像の除幕式は、昭和四十年三月十五日、卒業式終了後、本学院高校本館の玄関ホールで行われた。

第八節　教育の近代化の試み

一、開花した視聴覚教育

本学院の視聴覚教育は、昭和三十一年の十五周年記念教室が完成した時、既に始まっていたのであるが、十年後には、従来のような教師が教科書と黒板、チョークを使用しての授業形態から、スライド、映画、放

送、テレビ、テープレコーダー、オーバーヘッドプロジェクター等の視聴覚教材、教具を使用した効果的な学習をめざすものに変わった。

このため、本学院は昭和四十年度から、学院長の新しい教育理念に基づき、中・高では、各教科一名宛の職員が研究委員に委嘱され、新たに視聴覚教育研究委員会が組織された。この会の委員長に任命された菅谷愈教諭を中心に、学院長の二大方針、「施設設備の充実」、「研究組織の改善」に沿って熱心に研究が進められた。その研究成果を全職員に浸透させる意味から、昭和四十年十一月二十四日に、第一回校内視聴覚研究会が開かれ、視聴覚教育の研究に本格的にとりくむこととなった。

二、商業教育の体質改善

昭和三十年代も終わり頃になると、事務処理の合理化を図るため企業の事務機械化が著しく進んだ。このようなことから、本学院においては、社会の企業に合った商業人としての能力、教養を高めるために、商業教育の内容を改めなければならなくなった。その改善の方向は、商業教育に事務機械科を設けて、その技能を育てることにあった。

この商業教育の体質改善にあたって、本学院の商業教育は、どのように対処していくべきかについて充分研究した結果、商業科教育として指導できる事務機械を購入し、指導することになった。まず、昭和四十年度を指導準備期として、その間に更に研究をすすめて、昭和四十一年度から、新科目の事務機械科を設け、

また、計算実務科に加算機を加えた指導計画を立てた。事務機械はイタリアのオリベッティ製品が採用された。この資金の一部として、産業教育振興助成資金を利用した。

三、教育相談室新設

子どもを健全に育てるには、物的環境と共に心理的環境が正常であることが必要である。しかし、心理状態は各人さまざまであるため、学校集団教育では、手の届かない面も少なくない。そこで本学院では、中学・高等学校の生徒を対象に昭和四十一年度から、各人の状態に応えて、健全な成長を助ける教育相談（カウンセリング）を行うことになり、その係教師が生徒指導部の中に置かれ、この年の五月に、教育相談室を新設し、カウンセラーとして池亀巴教諭が任命され、教育相談に取り組むこととなった。その後、相談教師は増員されて、教育相談の活動と研究が一段と活発になった。その任には、宮川博太郎教諭が当たっていた。

第九節　公開研究会に学ぶ

一、千葉県私学生活指導部会開催

中学・高等学校の生活指導部は、昭和三十七年度に改組され、生徒への生活指導の面が強化され、そのさ